

武石公民館講座「千葉と武石をめぐる歴史の旅」第一回武石地域の旅 レジューメ

1. 仏岩宝篋印塔＝宝篋印塔と武石氏の関係、なぜこの地にあるのか

(1) 仏岩宝篋印塔 (別紙1参照)

- ・ 仏岩と呼ばれる高い岩の上に立つ宝篋印塔。塔高は相輪(別に保存?)を除いて85cm
- ・ 鎌倉時代の応長元年(1311)の銘があり、立っている石塔では、長野県下で在銘の宝篋印塔で最古。塔身は四方に四仏の種子を彫り、基礎と笠の周囲には、宝篋印陀羅尼を梵字で彫っている。
- ・ 銘文は『信濃史料』によると次のようである。

(南面) 応長第一之曆南呂上旬／□□弟子□□菩薩□□／妙法□□人生□滅罪□／

出離生死頓証菩提仏果／圓滿乃至法界等利益□／□印□石塔婆一基所奉(カ)／造立供養如件敬白

(西面) 肥前太守阿弥陀 / □□ (北面) 息女並日光峯宮□ (東面) 近江禪閣□善生□

- ・ ここに記された「肥前太守」「息女並…」「近江禪閣」は、だれか?

「肥前太守」＝箱根山宝篋印塔(別紙2参照)の「武石四郎左衛門尉宗胤」(『伊達世臣家譜』では「胤氏子従五位下肥前守初称弥太郎・又左衛門尉宗胤・・・」) 宗胤は武石胤盛の曾孫、1314年63歳で歿。

「近江禪閣」＝近江に基盤を持つ宗胤の妻方の実力者。宗胤の妻は、宇多源氏の血を引く京極氏信の息女で、佐々木道誉の大祖母。箱根宝篋印塔(別紙)銘の「源宗経」(＝佐々木宗綱)と兄妹。

(2) 宝篋印塔とは・・・

- ・ 階段状の笠と四隅に隅飾を持つことが特徴の石塔、元は基礎の内部に宝篋印陀羅尼という経を納めた。外面にも宝篋印陀羅尼が刻まれることがある。
- ・ 宝篋印陀羅尼経の「若人往在高山峰上至心誦咒・・・」の文言＝もし高山の峰上に登り、心をつくして咒(宝篋印陀羅尼)を唱えるなら、眼下に見える遠近世界、山谷林野江湖河海の一切の生きとし生けるものすべて、諸々の罪障が消滅し、災難から免れ成仏できる。

(3) 高山峰上に建立された宝篋印塔

1. 仏岩宝篋印塔(長野県)

2. 箱根山宝篋印塔(神奈川県)＝永仁4年(1296年)の銘と正安2年(1300年)の追銘がある

3. 宝篋山宝篋印塔(茨城県)＝形式から関東最古の大型宝篋印塔

・ 信濃仏岩と宝篋山は約190km離れた同緯度にあり、両地点から南方向へ等距離のほぼ正三角形の頂点の位置に箱根山が位置している。

- ・ この3つの塔の建立に関わったのは、忍性とその弟子の教団

忍性(良観 1217～1303)＝奈良の西大寺で叡尊から受戒、東国布教のため、宝篋山麓の常陸三村寺、後に鎌倉極楽寺を開山した真言律宗の僧。

仏岩と箱根の塔建立に関わった武石四郎左衛門尉宗胤は、忍性に帰依しその教団の活動に寄与。

2. 沖の牛石伝承

丸子町方面から武石村に入る旧道の左側にあり、正面高さ55～65cm、幅140cm、厚さ50cmほどの自

然石である。この村を開発した笹焼明神が乗って来た牛が変身したのと言い伝えられ、古くより村人から「牛石さま」と愛称されてきた。(HP「上田市文化財マップ」) この笹焼明神とは？

3. 子檀嶺神社・武石胤盛の石碑、笹焼明神

・子檀嶺神社＝「現在の武石村沖の五日町地籍に和銅五年（712）に創立されたと傳へられ、延喜年間に名神小社に列せられた。かつては近隣の住民より「五日町 明神」と愛稱され、信仰・憩の場であり、生活のよりどころであった。境内において五日毎に市が開かれ、かなりの物資が集散したと傳へられてゐる。」(『式内社調査報告』)

・武石胤盛の石碑＝子檀嶺神社の本殿より一段低い平場に、笹焼明神の祠があり、その祠の裏に、注連縄が張られ月星紋が陽刻された円筒型の石塔がある。銘は「武石平胤盛」、「武」の字は「文」の下に「止」の異体字

・笹焼明神社の墓股に彫りだされた3つの神紋のうちひとつは、月星紋。

・笹焼明神とは＝「旧暦卯月二日 笹焼大明神祭 この村を開いたという神の祭りです。笹におおわれた大地を焼きはらったことや笹ハ木の字を使っていたことなどが笹焼に関わりがあると考えられます」

まだ郷の名前もなかったころ入植してこの村を作った祖先を顕彰する祭りとするとその祖先とは、武石平胤盛ではないか。所領を得てその地名を氏とするのが一般的な武士の中で、逆に氏の名をもって地名とする場合は、そこがまだ名のない郷村であることが前提となる。その草分けの地にその名を残していったのが、武石胤盛であろうか。

・武石胤盛(1146～1215)＝平安時代末期・鎌倉時代前期の武士。千葉常胤の3男。母は秩父重弘の娘。武石氏(後の亙理氏)の祖。下総国千葉郡武石郷(千葉市花見川区付近)を領したことから、「武石三郎」を称する。源頼朝が挙兵をすると、父とともにこれに従い、木曾義仲・平家・奥州藤原氏と戦った。奥州合戦の後、父の常胤が頼朝から恩賞として受けた陸奥国の所領のうち、宇多郡・伊具郡・亙理郡の一部を譲られた。子孫は拠点をも亙理郡に移し、1339年頃に「亙理」を称し、武石に残った系統は千葉氏・里見氏に仕えたとされている。

4. 妙見寺と月星紋

・妙見寺＝真言宗武石山妙見寺といい、初めは後鳥羽天皇の文治年間に武石の豪族岳石三平胤盛が鳥屋(とや)に建てました。そのご移転、改築が行われ、宝暦年中に15世紀の住僧弘算が本堂に並びに妙見堂を再建し、このとき画家信尹を招いて本堂の天井に十畳の間一杯になる程の龍を描いてもらいました。この龍がいわゆる鳴龍です。龍頭の下で手を打つと見事な鳴龍を聞くことができます。(武石観光協会オフィシャルサイト・観光スポット・見どころ「名所・旧跡」)

・妙見信仰と月星紋(別紙3参照)＝妙見信仰は、中国で仏教と道教と習合し、仏教と共に日本に伝来した大陸由来の神で、中世は「妙見菩薩」として、千葉氏の軍神・氏神となった。妙見は北極星及び北斗七星を神格化したもので、千葉氏は月星紋や九曜紋を家紋とし、またその拠点には妙見を祀る寺社を建立した。

5. 堀の内館跡(武石氏の館跡)

・どんな居宅があったか、周辺はどんな様子であったかは、別紙4の図を参照のこと。

仏岩宝篋印塔 ほとけいわほうきょういんとう

応長元年（一三一一）／長野県宝

概要 宝篋印塔は仏岩とよばれる標高一三三三メートルの切り立った岩山の頂上に造立されている。塔は文政一〇年（一八二七）にここに登った村人によって発見されたもので、発見の経緯は『羽毛田日記』に記載されている。この塔は、銘文から旧小県郡武石村を所領した千葉氏流武石宗胤とその妻が、僧を通じて造立したと推測されている。

現状・規模 塔は風雨により破損が進み、相輪と隅飾を欠く。銘文は苔と摩滅により判読できない文字が多い。遺存する屋根から基壇までは、八五センチである。

形状 安山岩製。屋根は上部に五段、下部に三段の段形を造る。屋根軒の両端は若干外反するため、遺存しない隅飾は稜線が外側に開き気味で存在したと推定される。屋根軒と塔身、基礎（上部）は縁辺に輪郭を施す。塔身四面の月輪内には金剛界四仏の種子が刻まれている。基礎は二段で構成され、上の段形は三段である。本塔は関東形式であるが、基礎の枠が二区に分割されていないことから、関西の影響を多分に含んでいるものと推測される。

銘文 屋根軒と基壇（上部）四面に宝篋印陀羅尼經の經文が梵字で刻まれている。岩の下で発見された隅飾には、宝篋印陀羅尼經の冒頭部分が刻まれている。基礎（下部）に刻まれた銘文のなかには、「肥前太守成阿弥陀」「息女并日光峯宮」「近江禅閣」「応長第一之曆南呂上旬」の文字が確認される。

伝承 塔発見時、村をあげての大きなニュースとなった。本塔は、天保五年（一八三四）に書かれた『信濃奇勝録』と明治一三年（一八八〇）に書かれた村誌（『長野縣町村誌』）などで

その存在が紹介されたことにより、有名となり注目を集めた。学史的意義 造立年が明らかになると、宝篋印陀羅尼經が全文刻まれていることで貴重な資料である。また、小県郡と諏訪を結ぶ交通路（大門街道）から容易に仰視できる岩山の頂上に造立された本塔は、立地面で信濃に分布する石造物のなかで特異な様相を示す。

参考文献 『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』三、一九五。
『長野縣町村誌』二、一六三。『信濃史料』四、一九五。川勝政太郎『日本石造美術辞典』、一九六。『新編長門町誌』、一九九。櫻井松夫『仏岩宝篋印塔銘の考察』（『信濃第三次』四、一八、一九三）。福澤邦夫『福澤邦夫石造文化財拓本集』二（二〇〇六、実測図有）。



所在地 小県郡長和町大門追分／交通 仏岩登山口へはJR「茅野駅」より国道152号経由で車で40分、30分登り山頂に着く。山頂付近では鉄梯子・鎖を使って切り立った岩壁を登る。

（河西）

日本石造物辞典
二〇一二年 発行 工部省工業技術院 建築研究所
編集 日本石造物辞典編集委員会
発行所 前田 求 社
印刷 吉川 弘文館
発行所 長野県 茅野市 茅野町 茅野町 茅野町
〒387-0001 茅野市 茅野町 茅野町 茅野町
電話 026-222-1111
FAX 026-222-1112
http://www.shizokusho.co.jp/

箱根山宝篋印塔

「天下の嶮」と呼ばれる箱根山に、鎌倉時代の優秀な石塔や石仏が多数存在することはよく知られている。その中でも白眉となるのが、「多田満仲の墓」という伝承を有する大型の宝篋印塔である(写真13・1)。

箱根山宝篋印塔は、台石と後補の相輪を除く高さが二六九・三センチ(九尺)の巨塔で、台石と相輪を含めると現状の高さは三八九・七センチに及ぶ。本来の高さは四メートルを軽く超えるものであったと思われる。

箱根山付近で採取される安山岩製で、現在採掘されている石材では小松石に近い。背の高い基礎は輪郭を巻き、内に異様に大きい格狭間が配されている。基礎上の段形は三段。塔身は輪郭を巻き、内に胎藏界四仏の種子が三方に配されるが、本来であれば天鼓雷音の種子が彫られる面に、蓮座上に座して法界定印を結ぶ、胎

藏界大日と思われる如来像が浮彫りにされている。本来は、これが正面であったと考えよう。屋根は軒下の段形が三段、軒上は六段で、最上部に二区に分けた露盤を置く。隅飾は茨が一つ入る二弧ではほ直立しており、輪郭はな

東面を除く基礎格狭間内に銘文が彫られており、西面には施主「四郎衛門尉」の名と、願主として持田房祐禪の名、そして永仁四年(二二九六)五月四日の紀年銘が刻まれている。

この「四郎衛門尉」とは、近江の京極氏信のことである。評定衆など、幕府の要職を歴任した氏信は、本銘文の一年前となる永仁三年五月三日に死去している。続く南面銘文によれば、その遺志を継いで娘婿の武石四郎左衛門宗胤が結縁衆一八名らと合力して、この塔を完成させたようだ。また、南面銘文には石工として「大工大和国所生左衛門大夫大藏安氏(大和国出身の大藏安氏)」の名がある。

つまり、この宝篋印塔は岳父・京極氏信の遺志を継いだ宗胤が、永仁四年に完成させたものと考えることができる。石工の大藏安氏は、姓

が同じである上に名乗りに「安」字を含むので、額安寺宝篋印塔(奈良県大和郡山形市/本書「額安寺宝篋印塔」参照)を制作した大藏安清の息子と考えよう。額安寺宝篋印塔と箱根山宝篋印塔の年代差は、三六年である。

しかし、北面銘文には「供養導師」として「良観上人(忍性)」の名があり、さらに正安二年(二三〇〇)八月廿一日の紀年銘の後、「心阿」の名が刻まれている。(12光明坊十三重層塔で述べたように、心阿はそれまで瀬戸内地方で活躍していた石工である。

つまりこの箱根山宝篋印塔では、二つの紀年銘と二人の石工の名が刻まれているのだ。これは、きわめて異例のことである。石工の名が複数刻まれる例は時々あるが、その場合は名前が列記されるのが普通で、箱根山宝篋印塔のように面を違えて二名の石工の名が刻まれることはない。

また、二つの年号に関しては、永仁四年に宝篋印塔が完成し、正安二年に供養が行われたと解釈することもできないが、完成から供養まで四年もの間隔が空くのは不自然である。



写真 13-1 箱根山宝篋印塔

供養をかたちに

— 歴史的石遺物を訪ねて

『月刊石村』別冊シリーズ

101 期 二〇〇〇年 初版

著者 山川尚

発行者 中江道

発行者 株式会社

〒101-0041

東京都千代田区

千代田区

千代田区

千代田区

千代田区

千代田区

千代田区

千代田区

千代田区

第四節 その他の宗派と妙見信仰

妙見信仰

千葉氏をはじめとする両総平氏一族が、軍神・氏神として北極星及び北斗七星を神格化した妙見を尊崇したことは広く知られている。妙見信仰は大陸から渡来した氏族と関係が深いとも言われ、関東や甲信越の牧が広がる地帯に分布し、千葉氏を含む東国の平氏の中に根付いていった。日本三大曳山夜祭のひとつ秩父夜祭で有名な秩父神社も、両総平氏と同じく良文流平氏の一族である秩父氏が妙見をまつたものである。妙見は中世には仏教と習合して「妙見菩薩」と呼ばれることも多かった。

千葉一族の妙見信仰の中心に位置づけられていたのが、千葉氏の名の地である千葉庄に鎮座する千葉妙見宮（現千葉神社、千葉市中央区院内）であった。妙見宮は中世には別当寺である北斗山尊光院金剛授寺と一体化し、近世には妙見寺と称されたが、明治の神仏分離によって天御中主命を祭神とする神社となって現在にいたっている。



写真7 千葉神社 千葉市中央区院内



写真8 妙見像 佐倉市西御門神社蔵

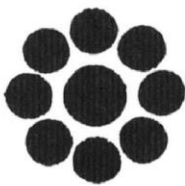
妙見社には御神体として妙見像がまつられることが多い。千葉氏系の妙見像は、北をあらわす神獣で亀に似た玄武の上に、童子形の妙見が立つものが基本的な姿である。

千葉氏や両総平氏は居館や居城の一画や近くに、必ずといってよいほど妙見をまつた。

妙見は北極星及び北斗七星を神格化したものであるため、千葉氏は天体をあらわした月星紋や九曜紋を家紋として用いた。



(月星紋)



(九曜紋)

千葉氏の家紋

八千代市の歴史

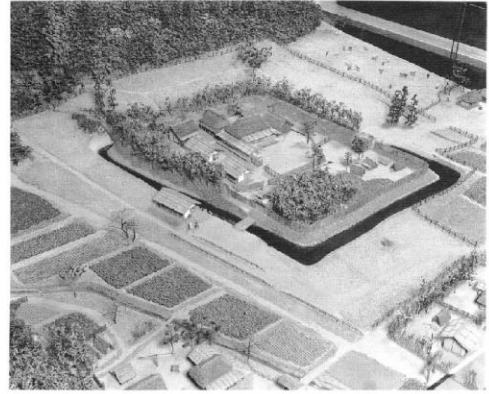
通史編 上

平成〇年五月十日 印刷
 平成〇年五月十五日 発行
 編集 八千代市出版さんぽ委員会
 発行 八千代市
 千葉八千代市出版部第二番地の五
 番室 〇四七〇八三二二一（代表）
 印刷 株式会社 山下印刷
 千葉市佐倉区佐倉千目二番五号
 電話 〇四七〇三〇八二二

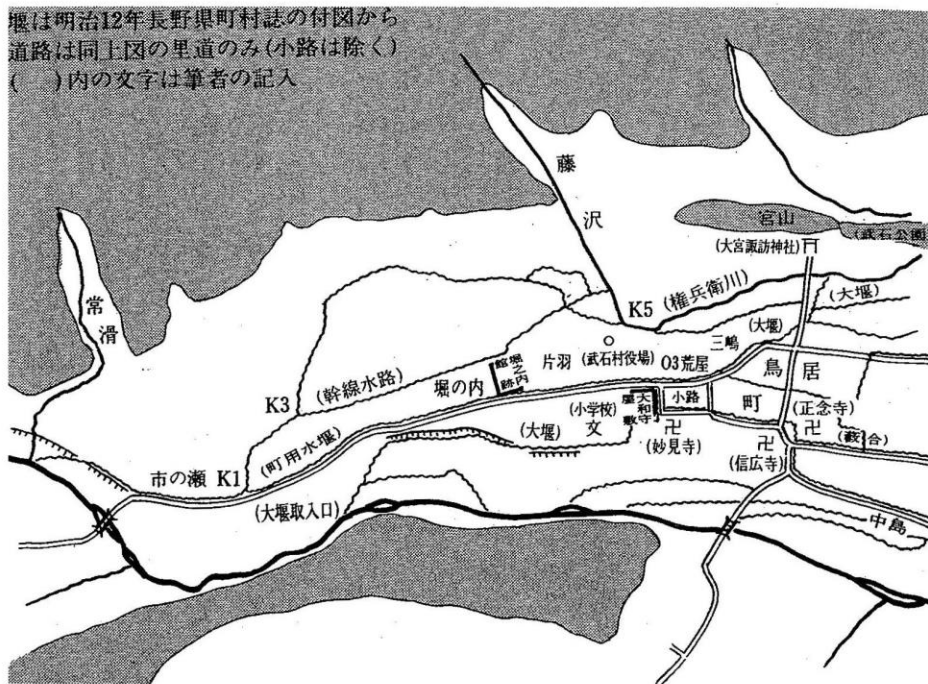
堀の内館跡（武石氏の館跡） どんな居宅があったか、周辺はどんな様子であったか



第3図 上武石堀之内館跡の図（武石村役場蔵地籍図を若干修正加筆したもの）



65 周囲の農村の様子。近くには神社やお墓もみられた（復元模型）



第2図 武石中心部の用水と館跡

『武石村誌 第二篇 村の歴史』
平成元年12月20日

日本歴史地理学会
1970-04-07 1884-0304-1170-2
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL:03-5561-1177
FAX:03-5561-1178
E-MAIL: JSHG@NII.AC.JP
JSHG: JSHG@NII.AC.JP
JSHG: JSHG@NII.AC.JP
JSHG: JSHG@NII.AC.JP